

常照

第850号

『月参りとは』

私たち僧侶は、毎月ご門徒の方々のお宅に伺い、月参り（月命日・月忌参りともいう）をお勤めいたします。月参りで様々なお宅に伺うと、お経をお勤めした後、色々なお話を聞くことがよくあるのですが、今回はその時のお話をいたします。

毎月、月参りで伺わせていただいているお宅の方がこんなお話をさ

れました。「お坊さん、お坊さん、うちは祖父母のころからお坊さんにお世話になっていて、月参りも長いことお勤めしてはいますが、この前、近所の方々の井戸端会議に混ざって話をしていた時に月参りの話になったのですが、うちは毎月お坊さんにきてもらっていると言ったら、うちはそんな古臭いものやめたわ。忙しいから月参りに時間を取られるのも煩（わずら）わしいし、お布施ももったいなしね。という方がいて、なんか複雑な心境になってしまつて。」ということを言われました。そこで私は「じゃあ来月からお参りに伺うのどうしますか？」と聞き返すと、なかなか心が定まらず、どうしよ

う、といった様子でした。

この話を聞いて皆さんはどう思いましたか？月参りは時間の無駄、古臭いしお金ももつたいたいと思えますか？それとも、月参りはせにやならんと思えますか？
 そもそもなぜ月参りをするのでしょうか？

浄土真宗のおつとめは、月に一度お参りすることで亡くなった方が迷わないようにだとか、崇（た）つてこないようにするためにつとめるお経ではありませんし、亡くなった方に捧げる、供養する、成仏させる、お経でもありません。真宗（浄土真宗）のお経はどこまでいっても「報恩感謝」のお経です。

『報恩感謝のお経』

では報恩感謝のお経とはどういうことかといいますと、亡くなった親、子、妻、夫、兄弟など、亡くなってもなお、この私を心配してくれている。そのことに「ありがとう」という形を表すのが浄土真宗のお経です。

亡くなられた方々が私のことを案じて、願ってくれているなんて信じられない、という人もいますかもしれないませんが、浄土真宗では亡くなった方々を皆「大きな深い願い」ととらえ、頂きます。自分も死ぬ、亡くなることを想えば、お

分かりになるのではないでしょう。か。この世に残していく親や子、夫や妻のことを考えると、心配で仕方がないのではないではないでしょうか。御恩をいただいた人であるならば心配するに決まっています。そうやって亡くなってもなお、私たちに心を配り案じてくださるその様を「大きな深い願い」といいます。その大きな深い願いは「生きている人が、その人生が辛く苦しくても生きていってほしい、できるならば笑顔で亡くなっていける人生を歩んでください。」という大いなる願いなのです。月に一回その大きな願いに「ありがとう」と感謝を表し、頑張って生

きていく気持ちを現すのが浄土真宗の月参りのお経、お勤めです。お参りなどしなくても気持ちがあればいい、という方がいますが、その気持ちはどのような形で表すのでしょうか？そういうことを言う人ほど亡き人に対する御恩など微塵も感じていないのではありませんか？

新渡戸稲造先生が「情けは人の為ならず、おのがこころの慰めと知れ。我、人にかけて恩は忘れても人の恩をば長く忘るな」という言葉を残しています。月に一度の亡き方に対する恩や願いを忘れず、その感謝の気持ちを形で表現することが月参りです。今の私た

ちは人の恩を忘れ、さも自分だけの努力で生きてきたような錯覚にとらわれ、大切なものを見失っています。それが人の心の闇として表れ殺伐とした社会をうんでいるのではないでしょうか。

人は一人では生きていけません。親、兄弟をはじめ多くの方の支えと願いの中で生かされてきたことを忘れてはなりません。

仏となり私たちに限らない願いをかけてくださる方々に、これからも月に一度感謝のお念仏を称えましょう。

南無阿弥陀仏 合掌

十一月の常例布教(ご法話)のご案内

○前期 十一月七日(木)〜十一日(月)

兵庫教区播磨中組光専寺

講師 藤本 智彰 師

○後期 十一月十三日(水)〜十六日(土)

山口教区豊浦組専徳寺

講師 原田 英真 師

○場所 小樽別院内

○時間 午後二時(法要終了後)〜

午後三時半

浄土真宗のみ教えについて布教使にご法話をして頂きます。
どうぞお誘い合わせいただき、ご聴聞に来院ください。お待ちしております。

発行所

☎047-0017

小樽市若松一丁目四番十七号

本願寺小樽別院

電話 (〇二三四) 二二一〇七四四番
FAX (〇二三四) 二九一四〇八〇番
テレホン法話 二七一六一六六番